

解答例 A

日常生活でのアイデンティティ形成、変容のメカニズムは多彩だ。単一民族と言われる日本人としてのアイデンティティには似通ったものがある。それゆえ、筆者が例に挙げる主要な構成要素の言語や肌色、国籍への帰属は意識にさえ上りにくい。しかし、日本においても、各人のアイデンティティを構成する諸要素の間に上下関係があり、それが時とともに変化し、ふるまいを変えるのは事実だ。

私には、両親の転勤で東京から熊本の学校に転校してきた時の体験がある。それまで友人と標準語を話すのが日常だった私にとって、熊本弁は極度になまった言葉に聞こえ、心から湧き上がる言葉ではなく、奇異な方言以外の何物でもなかった。私のアイデンティティは、幼い頃から話していた、東京で皆が標準的に話す言葉に帰属していたのである。その東京弁はテレビのアナウンサーが話す言葉のように完璧に美しい言葉ではなかったものの、ある種の都会的ですnobな、洗練されたもののように当時の私には感じられた。

部活の友人がバレーボールを「これ倉庫になおして」と言うとき、私は「『なおす』って何」と意地悪く聞いたりした。東京では「しまう」と言い、「なおす」は「直す」や「治す」の意味にしか使われない。「これ取っとな」という言い方も田舎っぽく聞こえた。しかし、熊本で長い時間を過ごし、友人の熊本弁に慣れた頃、自分でも「あとぜきして！」などと熊本弁が自然に口に出るようになって

